

# 戦後の獨逸文學

成 瀬 清

純主觀的な表現主義の文學はおよそ一九二〇年の夏を境目として、約十年間の壽命で漸次衰退し、純客觀的な新即物主義(Neue Sachlichkeit)の旗幟が翻へされた。キンデルマンは之を「即時代的」と「超時代的」とに分かつてゐるが、前者は大體唯物主義的プロレタリア文學の傾向を帶び、後者は一名「魔法的寫實主義」(Der magische Realismus)と稱せられ、物心一如、靈肉一致の境地を目標として全面的現實性の把握に努力する。ワルテル・レエムの所謂「現實に對する謙虛な心」を以て自然・人生の真相と神祕とを探らうとするものであり、一面ルウドルフ・シュタイネルの「新ゲーテ主義」(Der neue Goetheanismus)、即ち彼れの「人間哲學」(Anthroposophie)と接觸する。これは、純粹直觀と、之に相應する客觀的思惟とに依つて、官能的及び超官能的人間性を精確に認識しようとするもので、その爲めには、東洋又は中世期に於けるあらゆる祕義、魔法、接神術、降神術、千里眼、占星術、鍊金術等を應用し、然かも、抽象神祕に陥らず、嚴正な自然科學的精神を以て對象を研究し征服しようとする。思ふに、フロイドの精神分析學（フレイドのアナリユーゼ）の如きも一種の人間哲學と見ることが出来る

であらう。更に、近頃日本でも注目せられて來た、現象學的「人間學」(Anthropologie) も亦隱然かの新興寫實主義の思想的背景、又は根柢を成すものと考へられる。これは「人間の特殊なる現はれを對象とするものではなく、全體人間の在り方と構造とを對象とすべきもの」であり、「現實存在としての人間——この根據から抽離せられた意識現象を對象とする心理學と區別せられて、飽まで基礎と結附ける全體人間を對象とするもの」であつて、即ち、「心身の統一體として人間の本質的構造と其全體としての在り方」とが人間學の對象となる筈なのである。この「全體人間」を對象とする點に於て、今日の人間學は魔法的寫實主義と同一方向に進むものと思はれる。唯、文藝に於ては全體人間の在り方を對象とする場合でも、特殊な現はれから出發しなければならない。寧ろ、個々の具體的人間の存在と生活と運命とが全體人間の象徴となるべきである。即ち、人間學は文藝に現はれた特殊な人間相から人間そのものの姿を看取し構成すべきである。而して、このことは個在としての人間を對象とする場合でも、また、「歴史的意識と集團意識との構造から」人間を、人間社會を描く場合でも同様である。文藝家は何處までも「形態」に於て考へ、感じなければならない。

世界大戰後の獨逸文學の種類は主として小説であつて、感情の昂揚から生れた表現主義的抒情詩は影を潜め、プロレタリア意識に根ざす勞働詩と寫實主義的卽物詩もあまり多くは現はれない。戯曲の方面では、傾向的宣傳劇又は暴露劇、新史劇、並びにゲオルグ・カイゼル、ハーゼンクレエフ

エル一派の社會諷刺劇、探偵趣味を交へた精神分析劇、レヅネー物などがあるが、一般に劇壇は映画、殊にトオキイに押されて、經營難に陥り、従つて戯曲の優れたものが出ない憾みがある。最近、評判になつたアルフレト・デエブローンの「結婚」(Die Ehe)は、大體映畫式構成法を取り、幻燈、ラヂオ等を應用して、新しいビスカートル式舞臺を作り上げたところに特色がある。一般に戦後の文壇は抒情的昂揚と戯曲的劇情とから漸次叙事的平靜へ推移して來たやうに見える。以下、小説文學に就いて、その主なる一、二の種類を擧げよう。

## (一) 戦争文學

戦後十年の距離を置いて、戦争文學の洪水期が現出せられた。レマルクの「西部戦線異状無し」(Im Westen nichts Neues)を始め、レンの「戦争」、ツワイクの「兵曹グリシャの争奪」(Der Streit um den Sergeanten Grischa)、フリングの「兵士ズウレン」(Soldat Sulren)等數十種を擧げることが出来る。更に、戦後の社會状態を描いたものに、レマルクの「歸途」(Der Weg zurück)、レンの「戦後」、グレゼルの「平和」等がある。既に本邦に於てもレマルクとレンの作が翻譯せられてゐるから、此處ではカアル・オットオの「東部戦線異状無し」(Carl Otto: Im Osten nichts Neues, 1929)を紹介しておく。この作は、「極めて若い、無經驗の、どの點から見ても白紙である一義勇兵の報告である。彼は、すべての戦線、殊に東部戦線に於て、あらゆる境遇に置かれ、しかも終に死を免

がれたのである。」と著者は卷頭に述べてゐる。文學的價值は可なり低いもので、専ら説明的、報告的であり、屢々講義的敎訓的臭味をさへ帶びてゐるが、戦争の鳥瞰圖としては簡潔に要を得てゐるので、その内容の一般を述べることにする。

戦争當時、「西部戦線異状無し」、「東部戦線異状無し」、又は「全戦線異状無し」と常に報せられたが、この一見罪の無い文句は屢々最愛の人々の死を語つてゐたのである。十七歳の若い義勇兵は先づ下士官や特務曹長の横暴に苦められた。彼等は宗教的、人種的偏見から、加特力教徒を泥水の中に横たはらせたり、猶太系の兵卒を強制して豚肉を喰はせたり、また單に苦痛を與へる目的から、楊枝で營舎の床を擦らせたり、水筒の杯で水を汲ませたりした。出征當時の感激と熱狂とはいつか醒めて、無關心の状態になり、唯、機械的に動作するやうになる。特にロシア側には全く戦意を失つたものが多く、捕虜となることを喜ぶものも尠くなかつた。戦争が永引くにつれて、益々さうした傾向が認められた。始め、戦争はその年のクリスマス頃には終るであらうと考へてゐた者が随分あつたのだ。

人間の獸性の發揮——战友の死骸から金品を掠奪する者、彼等は死屍を喰ふといふ豺狼にも比すべきものである。

恐ろしい肉體的苦惱——麻醉劑の缺乏から、正氣のまま鋸で脚を切斷せられる負傷兵の悲鳴、狂

氣に隣した悲鳴！それは、戦線背後到る處で聞かれた人間苦の叫びであつた。

脱走と假病——これも隠れない事實である。殊に戦争の末期に於て、ロシアの革命思想に感染して一隊を擧げて敵軍に投ずるやうなことも稀ではなかつた。また、ミルクの中へ一滴の萬年筆用インクを入れて飲み、インク壺が空になる時分には尿の中に蛋白を證明せられてまんまと後送せられる者もあつた。

死の諸相——軍馬の死、無心な動物の最後の眼差より痛ましくいぢらしいものはあるまい。彼等は死に直面しながら、それが何を意味するかも知らないのである。負傷した軍馬が銃殺せられる刹那、彼等は怪訝な眼つきで軍醫の手にする短銃を眺めるのである。レンの「戦闘」では、フランスの負傷兵がドイツ兵のために銃殺せられる光景が描かれてゐる。この場合、人間と動物との間に何等の差異も無い。それは同じく「屠殺」<sup>シユラハゼン</sup>なのである。——東部戦線では凍死する者が續出した。寒氣を凌ぐために焼酎を飲んで眠り込み、そのまま醒めないものが少くなかつた。これ等は或る意味で幸福な死を遂げた者と云へる、あまり名譽な死ではないとしても。——それから、悲喜劇的の死とも云ふべきものは、虱に喰はれた痕の搔傷から、汚物が入つて敗血症を惹き起こして斃れる者などの場合である。これ等をも戦死と云ふべきであらうか。

女性の犠牲——内地に残つた女性の忍苦と活動とは別にして、戦線背後で献身的に働いたあらゆる

る階級の女性の勇氣と慈愛と感化とは特筆大書しなければならぬ。シユウエスタ看護婦エリーザベットの場合

——若い下士官Bは敵彈で顔面を粉砕された、鼻柱も上顎も無くなり、兩眼は失明した。そして、更に兩足は切斷せられたのである。彼は故國に美しい花嫁を持つてゐる。どうしても、この醜惡な自分を彼女に見せることは出来ない。このまま死んだら、せめて彼女は惜み悲んでくれるであらう。最後の手術に際して、彼は心臓の衰弱にも拘らず、局所麻痺の代りに全身麻酔をかけて呉れと懇請する。この事情を聞いたとき、エリーザベットの顔はさつと紅くなり、兩眼は涙で一杯になつた。醫師としてはどこまでも局所麻痺を用ゐねばならない、然し、人間として行動する場合には？エリーザベットはつひに軍醫と圖つて患者の願ひを容れることに決心した。——次には腦症を併發した重傷兵Mの場合——彼は到底死の運命を免れない身の上であるが、この世に於ける唯一の心残り、最愛の花嫁から一度も愛撫を受けなかつたことである。シユウエスタ看護婦マリーアが彼の心を憐み、花嫁イッルーデの身代になつて、眞夜中白衣を着けて彼を訪れ、接吻を許し、愛撫し、抱擁して、歡喜陶酔の中に永眠せしめた。ウエルフェルの長篇「バルバラ」の中にもかういふ優しくも雄々しいシユウエスタアが現はれる。

敵兵に十八才と二十才になる二人の娘を提供して、その代りに食物を乞はうとするロシアの婦人があつた。ドイツ兵は流石にこの哀れな犠牲に手を觸れることを敢てしなかつた。そして、三人の

爲めに食物を供給してやつた。「如何に多くの私生児が、かうして敵同志の男女の間に生れたことであらう！」

戦線に於ける性的倒錯——生死を共にする戦友は屢々友情以上の感情を懷くやうになる。同性愛の傾向が平時よりも増大するのは自然の勢ひである。ドイツでは「第三性」を認めよ、といふ聲が高い。一般に戦線に於ける性慾の調節は重大問題である。戦線背後、占領地帯を徘徊する女性には概ね皆性病に罹つてゐる。これ等には強制的看視と隔離とが行はれる。そこで一種の娼樓が出来上る。或は兵卒用、下士官用、將校用と三階級に分かたれる場合もある。両性間の關係もこゝに至つては悲慘の極みである。然し、平時に於ても同様の制度が世界到處に多少形を變へて存在することを思ふと更に憂鬱にならざるを得ない。——更に、性に基因する悲劇は戦後内地に於て頻發した。親友に愛妻を奪はれる「カアルとアンナ」との場合、而して負傷の爲めに性的機能を喪失して「男性で無くなつた」者の苦悶はトルニアの戯曲「獨逸男ヒンケマン」に於て深刻に描かれてゐる。この小説ではシュワルツの場合がそれである。

最後に大戦に於けるドイツ軍の損害が統計的に示され、將來の戦争が毒瓦斯戰の形に依つて行はれ、僅々數週又は數日の間に終結すべきことが豫言せられてゐる。

以上が、カアル・オットオの小説「東部戦線異狀無し」の拔萃的紹介であるが、戦前、戦争、戦後

に互つて、主として思潮的方面から現代ドイツ人の生活を描いたものは、フランツ・ウエルフェルの大作「バルバラ、一名敬虔なる心」(Franz Werfel: Barbara oder die Frömmigkeit)である。この八百頁に上る小説は、ゲーテの「キルヘルム・マイステル」のやうな自傳的修養小説で、將校の子に生れた主人公の生ひ立ちから、母の不貞、父の死、乳母バルバラの母性愛、僧院學校の生活、醫學の研究、出征、革命運動等を経て、終ひに船醫として孤獨な生活を送るやうになつた経緯が主として内面的に描き出されてゐる。これは「或る魂の發展」であり、同時に「或る時代の推移」であり、而してまたすべての「運動」と「目的」と「利害」とを超越して、人間性の本質へ向ふ憧憬の聲である。正義を追求する青年を主人公として、現代ドイツ青年の不安な立場と「指導者」<sup>フューラー</sup>を求める心とを根柢として、怪奇的事件を描き、巧みに大衆的效果を擲んだヤーコブ・ワツサアマンの二部小説「マウリチウス事件」及び「エッツェル・アンデルガスト」(Der Fall Maurizius; Etzel Andergast)と共にドイツ文壇最近の二大收穫だと云へよう。

## (二) 社會的及び文化史的小説

大戰は歐洲文明の瓦解であり、一大清算であつた。すべてが新らたに見直されなければならない。先づ、「法」の問題がある。「法」とは何であるか。電氣のやうな自然力であるのか、數學のやうな公理であるのか、或は人間が我と我が身を切り刻む欲求から生れたものでは無からうか。かういふ疑



問を投げかけてゐるのがブルツクナアの戯曲「犯罪者の群」<sup>フエルブレウヒエル</sup>であり、特に「軍法」に對する彈劾と見る

べきのはツワイクの小説「軍曹グリシアの爭奪」であり、「正義」の騎士として他人の不正を發くのに熱中してゐた青年が、その鋒先を轉じて自己の胸に擬するやうになるのが前記のワツサアマンの小説の主人公である。而して、特殊の法規に對する抗議を中心としたものゝ中では、先づ、刑法第二百十八條、即ち墮胎に關する條令に觸れる哀れな犠牲者の運命を描いたウォルフの戯曲「チアン・カリ」と、前に述べたデエブリーンの「結婚」がある。後者は、現今の經濟組織と結婚制度との矛盾を指摘し、プロレタリアの悲惨な生活状態と、墮胎を試みるべく強ひられる若い母の絶體絶命の立場を描き、更にそのコントラストとしてブルジョアの虚偽に充ちた結婚生活を曝露してゐる。「チアン・カリ」も亦同様のテーマで、娘の苦惱を救ふために過量のチアン・カリを與へた母は瀕死の娘の病床から引き離されて牢獄へ投せられねばならない。實際、この第二百十八條は年々約八十萬人のドイツの母に依つて犯される條令なのである。次に、刑法第百七十五條は、同性愛に對する禁令であるが、ドイツに於ては人口の約二十パーセントが同性愛的傾向を持つてゐると云はれる。この問題を中心とした作品は餘り見當らないが、前掲の「犯罪者の群」や幾多の戰爭小説の中に散見する外に、シュテルンハイムの戯曲「オスカア・ワイルド」などは當然この問題を根柢に置いてゐるのである。なほ、デエブリーンの大都會交響樂とも稱すべき長篇小説「伯林アレクサンデル廣場」<sup>プラッツ</sup>にもかういふ

「少年」が描かれてゐる。

最後に、集團的人間學の概念に相當するものに文化史的小説がある。曾てグスタフ・フライタークは六卷に亙る連續小説「祖先」(Die Ahnen)を書き、第四世紀から一八七〇年に至る、獨逸國民史をその中に織り込んだが、今次の世界大戰は更に作家の視野を擴大して、世界に於ける獨逸民族の位置と運命とをテーマにする作品を書かせしめるやうになつた。ハンス・グリムの「場所無き國民」(Grimm: Volk ohne Raum)、ヨーゼフ・ボンテンの「ヴォルガ・ヴォルガ」(Ponten: Wolga Wolga)の如きがそれである。前者は、戰爭に依つて植民地を失つたドイツ國民は如何にして生く可きか、といふ問題を取扱ひ、廣く舞臺をアフリカと歐洲とに取り、最後に若い寡婦をしてかう云はせてゐる、「ドイツの子供たちは私どもよりもつと笑へなくなるだらう——ドイツの場所が無いから」と。後者は(既に邦譯も出たが)、ヴォルガ河畔に於けるドイツ植民地在住の貧しい一小學校長が祖國への憧憬に堪へ兼ねて終ひに漂浪の旅へ出るといふ筋で、一名「途上の國民」(Das Volk auf dem Wege)と題してある。作者はなほ進んで他の舊ドイツ植民地に於けるドイツ國民の生活と運命とを描かうといふ意圖を持つてゐるらしい。

かうして、個人から社會人へ、更に國民から民族へと、「人間」を擴大してゆくところに、新興文學の廣汎な領域が開かれるのである。(終)